郷土の伝統知を再認識するための地域運営の試み
―飯山市の伝統的工芸品「内山紙」をめぐる地元小学生と教育学部生との協働学習活動―

小林　比出代

Ⅰ．研究の背景と目的

内山紙は奥信濃（飯山市）で作られる和紙である。内山紙の紙漉き技術は、豪雪地帯の冬の副業と相俟って今日まで発展してきた。

内山紙の始まりは、中国から朝鮮半島を経由し美濃地方に伝来した紙漉きの技法を、信濃国高井郡内山村（現・長野県下高井郡木島平村内山）の萩原喜右ヱが美濃国で習得し、一六六一年郷里に帰って自家で漉いたことに端を発すると伝えられる。この内山紙の原料は一〇〇％楮であり、冬場に「雪さらし」という技法によって繊維を漂白する。薬品を使わず風土に適した技法で漉くために、内山紙はしなやかかつ強靭であり、また、通気性や通光性、保温性にも優れ、ふっくらとしている。さらには、日焼けしにくく長持ちする。

しかし、このような地域の逸品である内山紙を漉くことができるのは、現在、内山紙伝統工芸士である阿部製紙の阿部一義氏・拓也氏親子お二人だけであり、その製造に関する伝承が薄れ行く危機にあるとも解せられる。書道における文房四宝の一つ、「紙」にまつわる長野県の誇るべき文化遺産が失われつつある現在の実状を見過ごしておくことはできない。

一方、内山紙製造の地元である飯山市瑞穂地区の飯山市立東小学校（全校児童四十六名）では、内山紙を、児童自身にとって日常のものであり、なおかつ貴重な伝統産業及び文化遺産でもあるとの見識を育成するための取り組みを行っている。真っ白で丈夫な内山紙に生まれ変わる原料となる楮の葉を象った校章を掲げ、在籍する児童達へ思いを託す東小学校では、毎年六年生が、阿部氏の御指導のもと、学校で育てた楮を蒸し、皮むきし、繊維をほぐすとの一連の作業をふまえて、自分の卒業証書を自身で漉いている。

本研究では、内山紙の歴史や現状を明らかにし、一方で、地域の誇るべき伝統産業を様々な形で伝承しようと試みる

地元小学校の児童達の在り方を調査探究する。本協働学習活動を通して、地域の子ども達が、郷土の伝統知を再認識できる恵まれた環境のもと、内山紙をめぐる自然や人との関わり、及び地場産業での伝統知の価値や重要性等を理解し、自分の住む地域を誇りに思えるよう育成することを目指す。また、本研究に携わる学生は教員養成系学部に在籍し、近い将来自身が教育の発信者となる。本研究を、学生自身が地域の伝統産業や文化遺産について研究し、受け継いだ知識技能をその先の世代へ伝えるといった本学学生の教育にもつなげたい。

Ⅱ．研究の方法

本研究は、平成二十九年度後期開講授業「書道特別演習」の中で、文房四宝に関する研究の一環として、郷土の貴重な伝統産業かつ文化遺産に関して探究すること、及びその文化遺産と地元の小学生との関わり方について考究することを目的として展開した。また、学生が年間を通して行っている「書道自主ゼミ」の活動とも連携をとった。

本研究結果に関しては、二〇一八（平成三十）年二月開催の「信州大学教育学部卒業書道展」でパネル及び展示発表を行った。

Ⅲ．研究の経過

【平成二十九年十月十四日（土）　阿部製紙にて】

○阿部一義氏から内山紙の歴史／内山紙の紙質／楮の生育から内山紙誕生への変遷／内山紙の漉き方の工程／内山紙の現在等を伺った。

○製造された内山紙の特質を調査した。

○楮から内山紙完成までの工程を考察し、阿部一義氏・拓也氏にご指導いただきながら、実際に本学部書写書道教育研究室の学生（以下「学生」）が内山紙を製作した。

【平成二十九年十月十四日（土）
飯山市ふるさと／飯山市伝統産業会館にて】

○内山紙に関する歴史的な資料等について調査した。また、研究発表に際しての展示方法等についてご教示いただいた。

【平成二十九年十月二十六日（木）　東小学校にて】

○担任の中村先生と、六年生（十一名）対象の内山紙をめぐる学習に関して打ち合わせをした。

【平成二十九年十月三十日（月）　東小学校にて】

○成長した楮を収穫する作業とその振り返り学習を六年生と学生が一緒に行った。

【平成二十九年十月三十一日（火）　阿部製紙にて】

○収穫した楮を蒸して皮むきする作業と振り返り学習を六年生と学生が一緒に行った。

【平成二十九年十一月十日（金）　東小学校にて】

○柔らかくなった楮を叩く作業とその振り返り学習を六年生と学生が一緒に行った。

【平成二十九年十一月三十日（木）　阿部製紙にて】

○六年生が自分自身の卒業証書となる内山紙を漉いた。その工程を学生が記録した。

【平成二十九年十二月　信州大学教育学部にて】

○学生が漉いた内山紙を用いて、自身の書道作品を制作した。

【平成三十年一～二月　信州大学教育学部にて】

○「平成二十九年度信州大学教育学部卒業書道展」でのパネル及び展示発表の準備をした。

【平成三十年二月十四日（木）～十八日（日）
信濃教育博物館（長野市）にて】

○前記全過程の記録を、完成した書道作品とともにパネル及び展示発表した。また、東小学校六年生と学生との学習交流会を行った。

Ⅳ．研究の成果

本研究における協働学習の成果の一端として、楮の収穫作業後に発行された「東小学校六学年学級通信　平成二十九年十二月一日号」での記事を一部紹介する。

こうぞの刈り取りでの子どもたちの感想は、「だんだん刈り取りが上手くなった。」、「もっと固い木かと思ったけど、柔らかかった。」「5か月でこんなにこうぞが大きくなってすごいと思った。」と振り返っていましたが、信大生は、「紙一枚作るのにどのくらいのこうぞの量が必要なのか」、「こうぞは同じ株で、あと何年くらい収穫できるのか」と違った見方・考え方で感想を話していました。

Rさんや Iさんの日記にもあるように、今回の信大生との活動は、子どもたちにとって新たな見方・考え方の収穫にもつながっているんだなと感じました。このような機会があり、本当にありがたい限りです。まだまだ信大生との活動は続きますが、子どもたちも楽しみにしています。

続いて、児童達が卒業証書を漉く工程に同行した後の学生達のレポートの一部を抜粋する。

子ども一人一人がこの経験をどのように感じ取り、どのように繋げていくかは分からないが、少なくとも「内山紙」という郷土の宝を知り、卒業証書を自分で漉いたという思い出は残るだろう。現在、長野県では「信州学」と呼ばれる郷土についての学びを取り入れていく活動が盛んになってきているが、自分の郷土を知り、自分は今ここで生きている、ここで生かされているということを意識するきっかけになると思う。（中略）今回の活動はまさに、生の「信州学」であったと思った。

最後に「卒業証書になるのが楽しみ」や「ここまで作ったのが楽しかった」や「他の地域の人にも知ってほしいと思った」などの感想が児童たちから挙がったのを聴いて、地元の伝統工芸品である内山紙を漉くという活動を五感を通して体験したことが児童たちの心に残ったことがよくわかった。この段階で他の地域の人に知ってほしいと思えた児童はもちろん素晴らしい気づきを得たと思うが、今の段階ではそこまで思えなくても、この貴重な体験を心の片隅に置いておくことができれば、いつか内山紙をどうにかして残していきたいと思うことができるのではないかと思う。そして、そのような活動ができる飯山の小学生たちを羨ましいと思った。

今回の内山紙での卒業証書制作も、きっと子どもたちの中に色濃く残ることだろうと思う。自分の生まれ育った郷土に愛着や誇りを持ってほしい、と考えたとき、今回のような活動はとても大きな意味を持つ。生まれに誇りを持つことは、自分の自信にもつながる。郷土を知ることが、いつの日か郷土のためになる仕事につながるかもしれない。

次ページには、本研究を通して学生が作成し、「平成二十九年度信州大学教育学部卒業書道展」にて展示発表したパネルを掲載する。

内山紙

わたしたちは、文房四宝（筆・墨・硯・紙）のひとつである紙について、長野県飯山市の伝統的工芸品である「内山紙」に関する研究調査を行いました。また、内山紙製造の地元、飯山市瑞穂地区の飯山市立東小学校での取り組みに着目し、六年生の皆さんとの協働学習を通して、郷土の伝統知を継承する子どもたちの在り方について学ばせていただきました。

1　飯山の歴史・風土

飯山市は長野県の北東部に位置しています。年平均気温は一一・一度、最深積雪平均は平地で一七六センチ、山間部では三五〇センチを上回り、日本でも有数の豪雪地帯です。一年のうち約三分の一の期間が雪に覆われています。また、飯山市は標高が低いため近隣の山からきれいな水が流れてきます。紙漉きには気温が低くきれいな水のある土地がよいとされているので、飯山市は紙漉きに適した土地といえます。

（参考：飯山市公式サイト）

2　内山紙の歴史・特徴

内山紙は、江戸時代初期の寛文元（一六六一）年信濃国高井郡内山村（現在の長野県下高井郡木島平村内山）の萩原喜右ヱ門が美濃の国で製法を得て帰郷し、自家で漉いたものが始まりと伝えられています。内山紙の名称はその地名に起因しています。奥信濃で紙の製造が普及したのは、雪が多い冬の収入源として適していたことや、雪が内山紙を作る工程の一つである「雪さらし」で役立ったことが挙げられます。

障子紙の代名詞と言われる内山紙は、昭和五十一年六月二日に「経済産業大臣指定伝統的工芸品（伝統的工芸品）」となりました。三五〇年の歴史がある内山紙ですが、大量生産の洋紙が普及する中、多大な労力がかかる手漉き製造は生産効率が悪く、生計が立てられないという理由から職人が年々減少し、現在内山紙を漉くことができるのは、阿部製紙の阿部一義さん、拓也さんのお二方のみです。

（参考：阿部製紙パンフレット）

3　阿部製紙さんについて

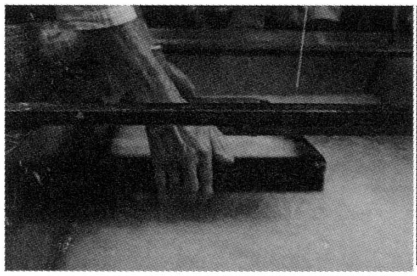
飯山市で三代に渡り伝統的工芸品である内山紙を製造しています。現在は、二代目阿部一義さんと三代目阿部拓也さんのお二人で、障子紙を中心に様々な種類の紙を漉（す）いています。お二人は「伝統工芸士」に認定されています。

阿部一義さんは、手漉きの和紙について、

「手漉きには手漉きにしか出せない風合いがある。機械漉きが増えているが、手漉きの文化はなくならないでほしい。」

と仰っていました。

楮の説明をする阿部一義さん



阿部一義さんによる手漉きの様子

4　内山紙の工程

楮（こうぞ）の原木

楮の刈り取り
育った楮の株元から枝を刈り取る。

皮剥（は）ぎ
刈り取った楮を釜で蒸し、皮を剥ぐ。

ふしとり
楮の表面の黒い皮やキズをけずり落とす。

灰汁（あく）抜き
煮た皮を一晩水にさらす。

煮熟（しゃじゅく）
皮を灰汁（あく）またはアルカリ性の薬品で煮る。

雪さらし
雪の上に楮を並べ、薄く雪をかける。この工程により内山紙の特徴である「自然な白さ」となる。

打解（たた）（叩き）
やわらかくなった楮を臼（うす）（打解機）でつく。東小学校の六年生は今回金槌（かなづち）や木槌を使ってこの作業を行った。

ふしひろい
ゴミなどを清水の中できれいに取り除く。

紙漉（す）き
楮を水に溶き一枚一枚漉く。

実際に東小学校の児童が体験した活動は赤い文字で記しています。

（阿部製紙さんに掲示された資料を参考に作成）

5　飯山市立東小学校の取り組み

―伝統工芸品「内山紙」と児童たち―

阿部製紙にほど近い飯山市立東小学校では、地元の伝統的工芸品を身近に感じる取り組みとして、六年生が自分たちの卒業証書となる「内山紙」を漉く活動をしています。

東小学校のプール脇には、「内山紙」の原料となる楮（こうぞ）が生えており、児童たちはその楮を使って紙漉きをします。①刈り取り ②皮剥（は）ぎ ③叩（たた）き ④漉き と、工程を何度にも分けて行い、楮の枝から「内山紙」が出来るまでを体験的に学習します。

楮の葉

楮の葉がデザインされた東小学校の校章

①　刈り取り

児童たちは、持参した小刀で手際よく楮（こうぞ）を刈り取っていきました。刈り取った枝から葉をむしり、一本の棒にしました。二〇～三〇本ずつの束が三つできました。

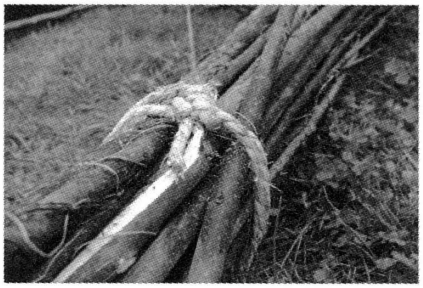
作業を終えた児童たちは、

「刈り取りは難しかったけど、楽しかった」

「楮がこれからどうやって紙になっていくのか知りたい」

と話していました。

楮を刈り取る児童の姿



刈り取られた楮の束

② 皮剥ぎ

刈り取った楮は、阿部製紙さんの大きな釜で蒸しあげられ、冷たい水の中に放たれます。熱で膨張させた後に急冷することで芯が縮むため、皮がするんと剥けるようになります。この楮の皮の繊維を使って紙を漉きます。手で厚い皮を剥ぎ、さらにそこから専用の道具を使って薄い表皮をこそげとっていきます。

児童たちは、大きな釜の蓋が開けられると「おおーっ」と歓声を上げ、蒸された楮の独特なにおいを「サツマイモみたいなにおい」「栗みたいなにおい」と表現しました。

皮を剥いだ後の枝はスベスベで手触りが良く、「これを杖にして明日の登山に行こう」と盛り上がる場面もありました。剥いだ厚い皮からさらに表皮をこそげとるのはとても根気が要り、「腰が痛い」とこぼしながらも丁寧に作業をする姿がみられました。表皮を剥いだ楮の皮を「ワカメみたい」と児童もいました。

表皮をこそげとる様子

③ 叩き

煮熟・灰汁抜きをした楮の皮から、水槽の中でごみを取り除きます。丁寧に行うことで、白くてきれいな紙を漉くことができるそうです。その後、繊維をほぐすために皮を木槌や金槌で叩きます。

児童たちは、仲間と話し合い、工夫をしながら作業をすすめていきました。ペットボトルに水を入れて叩く児童もいました。大量の楮の皮一つひとつに、丁寧に手を加えていく様子から、ここまで手をかけてきた楮や自分たちの卒業証書への思いが感じられました。

一生懸命叩いた楮の繊維を水の中へ放ったものを触りながら、「ふわふわ～」「犬みたい」「とろろこんぶみたい」との感想を述べていました。

ごみを取り除く様子

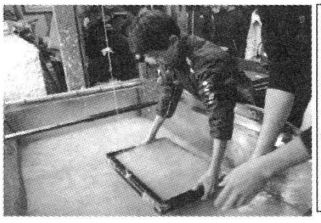
金槌で叩く様子

叩いた楮の繊維

④　漉き

漉き船には、綺麗な水と楮の繊維、トロロアオイという植物の根からとった粘液が入っています。トロロアオイの粘り気で、楮の繊維が水中に撹拌（かくはん）され、紙漉きがしやすくなるそうです。「簀桁（すげた）」とよばれる、紙を漉くための木枠で漉き船の中の水をすくい取り、両手で水平に保ちながら、前後左右に動かして紙を漉きます。

児童たちは、阿部拓也さんから内山紙の歴史や紙の漉き方についての説明をきいてから、作業に移りました。仲間が漉いているのをじっと見つめ、「できるかな」と不安そうにしていた児童も、いざ自分の番がやってくると、緊張しながらも、とても初めてとは思えない手つきですいすいと簀桁を動かしていました。


真剣な面持ちで紙を漉く姿

まとめの時間では、「秋に刈り取りから始めて、ようやく紙漉きができた」「楮から紙を漉くのは大変だったし、難しかった」「自分で漉いた紙が卒業証書になるのは嬉しい」「県外の人にも内山紙を知ってほしい」と各々感想を発表していました。

6　まとめ

児童たちの新鮮な反応や独特な表現にはいつも感心させられるばかりでした。ものづくりの大変さや楽しさを五感で感じとりながら、内山紙を丁寧に作り上げていく姿はとても印象的でした。楮から内山紙を漉き、それが自分たちの卒業証書になるという経験は、大人になって地元・飯山に思いを馳せるきっかけ、ひいては自分の郷土に誇りを持つことにもなるでしょう。

今回の活動を通して、内山紙の性質や歴史はもちろんのこと、児童たちが地元の伝統的工芸品に触れることの大切さを学びました。また、長野県の伝統的工芸品のひとつとして、内山紙の伝統が受け継がれていってほしいと強く感じました。

今回の研究及び協働学習に関しまして、
・阿部製紙　阿部一義様
阿部拓也様
・飯山市教育長　長瀬哲先生
・飯山市立東小学校　森本浩正校長先生
六学年担任　中村大先生
六学年のみなさん
・飯山市教育委員会　藤本智教様
・飯山市美術館　井端伸介様
・和紙研究会のみなさん
・飯山市伝統産業会館
・飯山市　ふるさと館
・信州大学教育学部　井田秀行先生
以上の皆様から、多くのご教示ご協力をいただきました。書写書道教育研究室一同、心より感謝申し上げます。

この展示発表は、
平成二十九年度
信州アカデミア（信大ＣＯＣ）事業ＣＯＣ事業
地域協働型研究・教育事業
の補助を受けて実施しています。

本協働学習活動を通じて、地域の子ども達が故郷における伝統知の価値や重要性を改めて認識し、郷里への矜持をより強固に持てたのではないかと感じている。また、本研究に携わった学生達には、郷土の誇るべき伝統産業を改めて見直し、身近で継承に困難を極めている文化遺産について講究したことで、次世代へ継承するための方策を思案するきっかけが提起できたと考えている。

【付記】
本研究は、平成二十九年度　信州アカデミア（信大ＣＯＣ事業）地域協働型研究・教育事業の補助を受けて実施した。また、本論考は、「平成二十九年度 信州大学「地域協働型研究・教育補助」成果報告書」に基づき執筆した。